

入 選

入 選

サトウキビの『何か』

石田 真 一 様



1. 教育学会学術大会
2. 高等学校時の新聞記事
3. 高等学校での栽培
4. 専門学校での栽培
5. 専門学校時の新聞記事

約10年前、私が農業科高等学校の教員を務めていた頃の話である。「大阪府でサトウキビって栽培できないんですか？」と生徒たちに問われた。大阪府の気候条件下でのサトウキビ栽培に興味を持った私は、生徒たちと栽培を開始した。沖縄県から苗を取り寄せ、春に定植すると、秋には草丈350cmにまで生長した。沖縄県でよく目にするサトウキビ畑が大阪府の高等学校に誕生していた。刈り取って、しがんでみると、驚くほど甘かった。糖度を測定すると20を超えていた。栽培に携わった生徒たちは大喜びであった。

約3年前、私が専門学校の教員を務めていた頃の話である。「私たちもサトウキビの栽培をしてみたいです」と学生たちが集まってきた。新入生に対して、研究に取り組む姿勢を指導した際、高等学校教員時に実施したサトウキビ栽培を例に挙げて説明した。その結果、自然発生的にサトウキビ部という組織ができてしまった。仕方なく、限られた研究予算の中から、資材を購入し、栽培を開始した。学生たちは栽培だけではなく、サトウキビ繊維を用いた有機化学研究、小学校授業におけるサトウキビの活用方法研究にも取り組んだ。それらの活動成果をある教育学会の学術大会において学生たちに発表させたところ、最も優れた発表に与えられる学生賞を受賞した。栽培に携わった学生たちは大喜びであった。「サトウキビってスゴイですね、面白いですね」と大学生が言う。

現在、市民農園の運営・拡充に関する職に就いている。昨冬のある日、事務所の電話が鳴った。教育学会の学術大会で名刺を交換した大学の先生からあった。自らのゼミ学生に卒業研究として幼稚園でのサトウキビ栽培に取り組ませたいのでアドバイスを欲しいとのことであった。私はその依頼を快諾した。大学生から質問の連絡が来るたびに、アドバイスをを行っている。幼稚園の園児たちは園内で日々大きく生長していくサトウキビに大喜びしているとのこと。私は、サトウキビ栽培に関わった多くの若者を知っている。皆に共通していたことは、笑顔で楽しくサトウキビの姿に大喜びしていたということ。サトウキビには若者を惹きつける『何か』が備わっているように思えて仕方がない。その『何か』を知るために、今後も若者とのサトウキビ栽培に携わっていきたい。ひょっとすると、若者たちは太陽の光を浴びて大きく生長するサトウキビに自らの姿を重ねているのかもしれない。

沖縄で育つイメージのあるサトウキビを気候の違う大阪で育てるという挑戦、草丈350cmほどの高さまでぐんぐんと成長する生命力を感じながら育てる体験、収穫して黒砂糖に加工、サトウキビ繊維を用いた有機化学研究など、サトウキビ栽培を通じて、学生さんがたくさんさんの学びをされていることをとても頼もしく感じました。サトウキビを育てる過程で、若者たちの好奇心を高め、みんなで体験したことが自信につながる様子が目に浮かびます。

石田様のサトウキビ栽培を広める努力が、それに関わる若者たちの生き生きとした笑顔をつくっているのですね。これからも植物を通じた素晴らしい学びの場が広がることを願います。

講評

Green
information

グリーン情報
編集部